

編集後記

2005年9月から日本消化器外科学会雑誌の編集委員を仰せつかりました。本誌の発展のため一生懸命努力する所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

本誌では投稿されてきた多数の論文を編集委員が分担して査読したうえで、毎月開かれる編集委員会で討議している。私は本誌のほかにも幾つかの雑誌の編集委員を務めているが、本誌の編集委員会に出席して他誌と異なる点に気づいた。

本誌では投稿論文の査読、討議において、論文の「あら探し」というよりも、論文のデータ(素材)を活かしてどのように修正したら優れた論文に仕上げることができるかに重点を置いている。編集委員会から著者に修正を求め、その修正され戻ってきた再投稿論文を再査読することが多いのは、他誌とも同様である。しかし本誌ではさらに再修正、再々査読にまわる論文もしばしばみられる。これまでの編集委員の熱意と、厳しい指示、激励にも挫けずに応えてくる投稿者の努力に頭が下がる。

本誌では多くの症例報告が投稿されてきている。たしかに「まれな症例」「珍しい症例」の報告ではあるが、第1例目ではなく「例目」「本邦では第1例目」である論文であることが多い。このような場合には、これまで報告された症例と比べてどのような特徴・特色があるのか、どのような新しい知見が得られたのかをよく考察し、情報過多とも言える世の中でその症例報告論文を追加することの意義を強調するような論文を作成していただきたい。編集委員も査読・編集業務を通して、セールスポイントが明確で価値ある論文となるように協力していきたい。

去る2005年7月に東京品川で開かれた第60回日本消化器外科学会定期学術総会の事務局を務めさせていただいた。総会では例年よりも多い16500人余の参加のもと、多数の優れた演題が発表され、活発な討議が繰り広げられた。本学会の活動性や研究水準の高さを物語っている。総会当日の熱気を本誌にもぜひ再現していきたいと考えている。

(杉山政則)